

1 保育の計画性

月案、週日案、避難訓練等、保育計画を立てて保育を営むことが習慣化でき、随時、自己の保育を振り返る記録の機会を取ることもできた。一方で、習慣化を優先するために、幼児の実態をまとめる項目を省いたことで、全体を俯瞰してまとめる機会を逸してしまった。そのため、保育がいささか散漫的になったことは否めない。改めて、週日案、月案の様式を見直し、幼児の実態としてクラスの全体的傾向を捉えられる項目を追加するとともに、書く内容を生活、外遊び、中遊び、自然とのかかわり、個別対応として整理し、より指導計画位置づく週日案の様式に切り替えることにした。

2 保育の在り方、幼児への対応

昨年の反省を踏まえ、認知面での支えや本人の困り感の早期発見に努め、個別対応を柔軟に行うようにした。人員の配置もそれにともなって柔軟に行い、職員間での情報の共有に努めたため、どの子どもも前向きにさまざまなハードルを乗り越えていくことができた。

また、食べる環境をシンプルにするため、ランチルームの開設を行った。遊び空間と食べる空間がはっきり分かれたことで、午後の遊びの充実が図られたが、食べるのが遅い子どものモチベーションが上がらず、いつまでたっても食べ終わらないことや援助のやりくりが難しいところがあった、基本的な生活習慣の問題は、2歳、3歳児の頃に、いかに分かりやすく、有能感をもって取り組めるかが鍵を握っている。そのような意味で、視覚支援の充実が課題である。

3 保育者としての資質や能力・良識・適性

保育の質を担保し、例年と変わらない成果を上げていくために、担任をもつ若手の保育者たちに多くの負荷がかかってしまうという園運営の難しさが数年続いている。特に、子どもの発達のはらつきに対応するスキルは、新たに課せられている業界全体の課題でもある。どの保育者も誠心誠意、子どもに向き合い、その成長を心から願っている。しかしながら、保育は専門職であり、それぞれの保育者がもつ課題を課題とせずにいることは不可能である。それは、保育の質の担保にかかわり、子どもの育ちに直接影響する。それぞれの課題を園全体で支えることができるよう、次年度は業務内容の抜本的見直しを図り、余裕の持てる職場環境を目指す予定である。それによって、個人の良さを発揮し、一人一人の課題を職場全体で支える仕組みづくりを目指す。

4 地域の自然や社会とのかかわり

自然とのかかわりは、本園の保育における大きな軸の一つである。今年、3歳児が触覚をテーマとして自然とのかかわりに取り組んだことは非常に評価できる。感触をオノマトペによって外化する体験を通して、対象物の質感をはじめとする確かな学びを積み重ねることができた。3歳児だけでなく、虫の飼育を通して命の問題にせまった年長をはじめ、どの学年もそれぞれのテーマ、および季節に応じて豊かな自然体験を行うことができた。

また、コロナ対策のため、保幼少連携事業を具体的に行うことができなかった。また、例年、園で行っていた地域主催の人権イベントについても昨年度に引き続き、今年度も活動が難しかった。

5 研修と研究

新人保育者養成について、大妻女子大学の岡先生に引き続きご指導いただくことができた。また、生活発表会については、共立女子大学の田代先生にご指導いただくことができた。対面でご指導いただき、より充実した研修となった。また、保育マップ型記録の質の向上について、聖心女子大学の河邊貴子先生に Zoom を通してご指導いただくことができた。

また、必要に応じてキャリアアップ研修等の県主催の研修にも参加している。一人一人の保育者が、自分たちの専門性を理解し、説得力を持って、自分の保育を語るできるようになりつつある。